第三回 文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第三回文芸思潮新人賞に御応募くださいまして、まことにありがとうございました。今回は前回より微増の四四篇の応募数でしたが、少数精鋭と言うべく優れた作品が集まり、発想の鋭さ、また新しい視点や構想による作品が多数見られ、新人にふさわしい世界を開いてくれました。卓越した文章が目立ち、新世代の言語力を示していました。

九月末に予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、今号は優秀賞作品三篇だけを掲載させていただき、また次号以降に順次掲載の予定です。

授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、今年もコロナウィルスの影響が尾を引いた関係から見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、締切、審査料などほぼ同じ要領にて募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちして申し上げます。

最優秀賞

該当作なし

優秀賞

「作品」
薛沙耶伽（東京都大田区）

「未踏の創造と死と」
渡部裕也（埼玉県さいたま市）

「宝を後にして」
壁　晃弘（鹿児島県霧島市）

「プリンセス・パラドックス」
倫子（大阪府守口市）

「白魔術」
中山喬章（京都府京都市）

※「宝を後にして」、「白魔術」の作品掲載は、誌面の都合により、次号に掲載させていただきます。

奨励賞

「ヒーロー序説」
見坂卓郎（神奈川県川崎市）

「アトラップ・レーヴ」
西上　礼（福井県三方郡）

「蒼い世界」
小田桐ユウ（千葉県千葉市）

佳作

「お客様の声」　卯月　律
「海が呼んでいるから」　松山尚紀
「ユウ」　山下止水
「初恋」　山中勇樹
「楽園」　木坂　京
「軍艦岩」　堀口現代人
「ジンクスの日」　米井暢成

選評

力作揃い

大高雅博

今回は力作揃いで、選考は難航するのではと思われた。

残念ながら最優秀賞は該当作がなかったが、優秀賞の中で、一番新人賞に近かったのは薛沙耶伽さんの「作品」だった。選考委員の中で、評価が二分したのは惜しかった。主人公は、妊娠七週目で、便器の中で胎児を産み落とすのだが、それは、胎児ではなく、芋虫のような別の生き物だった。それが「作品」で、それを育てていくのだが。小説は基本的には何を書いてもよく、どんな突飛なことでもそこにリアリテがあればよい。僕はリアリテがあると感じたが、最初の「作品」を産み落とすシーンは女性にしか描けないようなおどろおどろしさで男性選考委員は少し引いてしまったかもしれない。夫との出会いはマッチングアプリで、最初に会ったときは、花粉症でマスクをしたままというような今日的な出会いが面白い。夫はバイオアートの芸術家で結局、その胎児のような「作品」は、その主人の作品となりそうということで終わるが、その点につき選考委員から指摘があった。別物とはいえ胎児を作品にするのには、道義的な拒否感が生まれる。確かにそこは作り過ぎたかもしれない。上手の手から水が漏れるである。枚数の関係もあるが、父親がそれを見て、嫌悪感を覚え否定するところから始まる物語もあったかもしれない。

優秀賞の倫子さんの「プリンセス・パラドックス」は、安定した結婚を望めたが、その男を捨てた女が、以前に恋愛関係にあった女性のもとに走る、という作品で、こういう作品が、さらりと新人賞に応募されるということ自体、時代が変わったと思わせるものがある。ただ、それだけでなく、何箇所かとても良い表現があり、文章力でも評価された。しかしながら、時代はもっと、先に進んでいる可能性がある。最近読んだ本では、人の脳内では、男の部分と、女の部分が、モザイク状になっているという。脳内のほとんどが男や女というのは、ごく稀で、男と女の間にグラデーションができ、色々なヒトが存在するということになる。アメリカのフェイスブックでは、性別の欄では、すでに何十種類の区別があるという。頭では理解できるのだが、俄には全てを信じるには抵抗がある。ただし、そう考えると、色々と腑に落ちることもある。子供のうちはできるだけ性差をなくすような試みが出てきているし、それは全体に広がる可能性がある。古今東西の小説家が恋愛小説を書き、新しい恋愛小説は出にくい状態にはある。自覚した男と女の間にあるグラデーションの人々はどんな恋愛をするのだろうか、そこが、今後の小説の狙い目かもしれない。

優秀作壁晃弘さんの「宝を後にして」は、ベトナムから来て、不法入国者となっているが真面目に働いている者と主人公は友人になる。彼を助けようとするが、失敗し、結局は彼は犯罪を犯してしまう。これも今日的テーマで、難民や外国者の労働者は、受け入れざるを得ないのに、政治家や官僚は硬直していて時代についていけなくなっている。外国人労働者に関しては解決の方法はあると思う。そのためにはこういう小説は必要である。題名と内容がマッチしていない気がするが。

優秀作中山喬章さんの「白魔術」は中山さんにしか書けないもので魔術師が面白く、もっと、その辺の分量を増やしてもいいんじゃないかと思う。自分にしか書けない場を持つことは良いことだと思う。ただ、自分が見つけた素材を、もっと深く掘ってみると小説が変わるかもしれない。

奨励賞の小田桐ユウさんの「蒼い世界」は多少毛色の変わった作品で、寮にいる主人公は、冬休みで、同級生が次々と帰省する中、一人残り、意味もなくロッカーに隠れてしまう。その衝動は分かる。そして、出られなくなるのだ。結局、管理員に見つかるのだが、一緒に掃除などしているうちに、何かを取り戻す。それはなくなった兄のことらしいが、詳しいことは語られず、ただ、兄の携帯に電話し続けることで、母親が気づき、寮に迎えにくる。母親と一緒に寮を出るところで終わる。かなりの文章力がある。何かもう少しなのだが、足りないのか、過剰なのか、その両方かもしれない。

その他に、着ぐるみを被る人を描いた作品（見坂卓郎さんの「ヒーロー序説」）六本目の指が生えてきた男を描いた作品（友井コウさんの「Built-in Memory」）など面白い題材のものが多かった。

最初に書いた通りに力作が多く、今後に期待が持てると思う。頑張ってください。

盛り返した新人賞

八覚正大

前年度第二回の低迷に比して、今回は盛り返した感がある。全体を通して言えば、作者の内面における質的深さの熟成、それを表現として熱いメッセージに打ち出そうとした何作かに出逢えたのは、読み手としても楽しかった。

「作品」

出だしから、なかなか引き込まれた。妊娠、トイレでの流産〜でも、何か、違う、既存のそれとは全然違う！〈様々な赤色が混在する水溜りの中に、ぺしゃりとしぼんでしまったお祭りのヨーヨーみたいな袋が浮いていた……ややあってそのヨーヨーから魚のような生き物がどぅるりと出て来た〉……驚くような描写が続いて行く。〈その光景にはどうしようもない生のエネルギーみたいなものが満ち溢れていて、グロテスクさと神聖さがぐちゃぐちゃにまざりあって私を圧倒した〉そして、その肉塊？　を育て始めるのだ。

この数ページの描写、これはもう圧倒的に評者を打ちのめし、断トツにこの作品を推した。夫もまた変な人物で、それを観て〈眉間にアンモナイトの化石ばりの深いしわ〉を寄せる。彼は特殊なアート分野「バイオアート」の実践者……。結婚するに当たり、厳格な彼の両親に対し、〈私はネットを参考にしつつ嘘八百の家系図を自作した〉と。なかなか負けていない主人公。そしてラスト、その夫のノートに書き留められた言葉、〈ああ僕と妻にはこれから素晴らしい日々が待ち受けているだろう……人々を驚かせる作品が、ついにこの世に生まれたのだから……彼らはみな、僕の芸術活動について、色々と好き勝手に批評し気持ち悪がりながらも、愉しい恐怖を求めに来るだろう〉と。ここには、知性と、奇妙奇怪さと、おどろしさと、実存の不思議さと……それらを認知認識する「人間」というもののリアリティが、見事に描き出されている、驚いた。

「白魔術」

インドネシアの大学で、介護士として来日を希望する生徒たちに日本語を教え、かれこれ十年になる日本人教師の主人公。実は彼は東日本大震災の時のショックを抱え、それを癒す意味もあって当地に来てもいた。

そこでの関りや、日本語の直し方などの描写が面白い。

そして自らの精神的立ち直りを求めて魔術「ククワタン」を求めていく。かつて会った学生のシェトカは、生地へ戻ると別人になっている。〈目だ。目が違う。ギラギラと、燃えるように輝いているのだ。目に力が宿っているのだ〉と。土地の霊と繋がる癒しの力が漲っているようだった。

「宝を後にして」

希望に満ちて日本に来たものの不法入国者とされ、強制送還になるベトナム人。彼との関りを実録的に描いたなかなかの作品ではある。主人公は〈動ける人を集めて、いっぱしの街ならそこら中にある建設現場に雑工を送り込んで一人当たりの人夫代からピンハネをすることを主な生業とする会社〉の社員。その実態が描かれ、主人公は心に感ずるものがあり、最後は嘘までついて彼を庇（かば）おうとするが、ビザは認められない、そしてベトナム人は犯罪を犯してしまう……悲しい結末だが現実を見据えている。

「未踏の創造と死と」

自殺した芸大生と芸術工学の教授の話。〈最先端技術を有する先進国では、生まれた直後、脳内にマイクロチップが埋め込まれる。脳を補助するプログラムをチップに書き込むことで、人間の生産性を高めるためだ。〉という近未来のＳＦ。

東条という学生が、「僕に残された創作はもうない」と言って飛び降り自殺する。そして教授は〈……彼が絵を見た時の脳の状態も、チップを取得したデータを使って解析済みだ。……抽象画を生み出す人工頭脳の開発も容易であった。……つまり今回の実験は成功だったと言える。狙いは芸術家から創造性を奪うことであった。……最終的な目標は、芸術界に居座る重鎮たちを東条（自殺した芸大生）と同じ方法で消し去り、人工頭脳と芸術とが交わる研究、それが許される状況を作り上げることなのだ。〉と。発想は奇抜だし、ＡＩの情部門への進出も取り沙汰される昨今だが、死はそんなものなのだろうか、またその根底にある「恨み・復讐」のような部分が何なのか、〈芸術界の進歩を加速させるための、銀の弾丸〉という意味も伝わっては来ない気がした。

「ヒーロー序説」

〈「高校までは行っとけ」とうるさい父に渋々従って、高校卒業と同時に上京し小さな芸能プロダクションに入った〉主人公。うだつは上がらず、カブトガニの衣装を纏い、悪役の立場に甘んじている。〈布団にもぐると酸っぱい臭いがした。備え付けのエアコンはカタカタと小刻みに震えるばかりで部屋を冷やす気はないらしい。暑さのせいで寝苦しく、何度も寝返りを打っているうちに遠くの方からうっすらと眠気がやってきた〉と。

そんな中、バイト先の精肉コーナーのパックに穴が開けら

れているのが発見され、それが男の子の仕業と分かってくる……。その男の子はマイナーな悪役のカブトガニを応援し、自らの思いをパックにぶつけていたのだ。それを悟った主人公は、舞台の上から彼を見つけ『君の力を貸してくれ、さあ！』と舞台に引き上げる。その男の子は〈段ボールで自作したと思われるカニバサミ型のグローブを右手に装着していた〉。

そしてラストがいい。〈男の子は興奮したのか顔を赤くしてキラキラした目でおれを見上げている〉。社会的善悪のまだ分からない子どもを、そのマイナーでも純真な心を知って守ろうとする「大人の優しいまなざし」が光っている。この作品を読みながら、遠い昔、灰谷健次郎の「ウサギの眼」を読んだ記憶、そして開高健の「裸の王様」に感動を禁じえなかったことを思い出した。

「プリンセス・パラドックス」

ミルクパズル――〈それらは、ジクソーパズルのピースだった。彩はなく、白でできていた。……絵の描かれていないパズルのこと〉と。そしてその後の〈弾ける泡を立てるミルクを確認し、火を止めた。熱く、白いミルクを白いマグカップに注ぐ。白と白。空を踊る熱い液体と、ちょうどふさわしい重量の音を伴って割れる個体。白い破片で割れる体は、赤を流して抗する。……〉の描写は良かった。ただ、女同士の愛、そこに男も入りつつ、やはり女同士の――という感覚が分かり得なかった。

「初恋」

幼い時に出逢い、同窓会で再会し恋をするものの、その女性とは別れてしまう。〈ケンジは目を見開いた。そこにいたのは別人だった……。あの日、やわらかい日差しがふり注ぐ部屋で目にしたもの。華のように可憐で、凛とした、たしかなもの。失われないはずのもの。しかしいま、目の前にいるのは、ただの一個の、女だった〉という描写は、リアリティをもって突き刺さってくる。しかし作品としては場面、状況の描写が乏しい感が。

「海が呼んでいるから」

精神病で就労施設に務めている男性が主人公。知り合った男と海へ行く。幾つかの章に分かれ、エピソードは面白いが、展開がなかった、もっと書き進めて欲しかった。

「豪雨」

沖縄戦の祖父からの話、良くは描けている。〈そのまま、寝転がっている妹の横で、僕は……遠くで聞こえた砲弾の音が、かなり近くで聞こえた。……命までも理不尽に切り裂く恐怖そのものの音だった……自然の驚異にはない不快な重圧を感じた。〉そんな表現には臨場感があった。ただ、新しい視点が読みたかった。

「Built-in Memory」

六本目の指が生えて来る――というのはぎょっとしたが、夢や空想より、現実のリアルさをもっと読みたかった。

「アトラップ・レーヴ」

ちょっと洒落た小説で、タイトルを含めフランス語が幾つも出て来るが、言葉に比してその感覚のリアルさが、あまり伝わってこなかった。

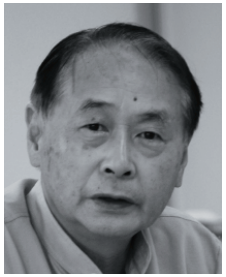
「蒼い世界」

雪の描写はなかなか読みごたえが感じられた。〈新しく降り積もった雪が現実のものとは思えないほど蒼く……一瞬たりとも明滅の瞬きを止めることはなかった。……月明かりの中で読む小説は、まるで薄暗い深海で読んでいるような気がした……〉。管理人との話もけっこう描けてはいたが、なぜ一人寮に残っていたのか、理由が伝わってはこなかった。

次回をさらに期待したい。

驚いた文章レベル

五十嵐 勉



第三回「文芸思潮」新人賞は、すでに下読みの段階で、驚かされた。応募総数四四篇は、昨年の第二回の応募数四一より若干増えている数字に過ぎない。驚かされたのは、その内容である。下読みの段階では、A、B、Cで評価する。AまたはA×がだいたい最終選考候補になる。B◎も他の選考委員に読んでもらった方がいいと思われる場合は残す。そうした選別を経て普通最終選考に残るのは、一割ほどである。他の賞、例えば銀華文学賞や、エッセイ賞や、現代詩賞の場合はほぼその割合である。ところが今回の新人賞の場合、A、A×が二四、B◎が一六、なんと四〇篇、九割が最終選考候補と言っていいレベルの高さだった。残すのは数ではなく、作品の質なので、理論上は全部がAということもありうる。しかし現実がそれに近いものになったことには、驚いた。この新人賞の応募者数の少なさはおそらく日本の公募文学賞の中で一番であろうが、作品のレベル

の高さの割合は逆に最高であろう。ここまでレベルの高い作品が集まってくる理由はいったい何か、しばらく考え込まずにはいられなかった。うれしい応募状況である。

何よりも、文章がいい。濃密で、思索の裏打ちがあり、彫りも深い。SNSや投稿サイトで見る軽薄な文章群とは対極的なみっしりと充実感のある言語群である。銀華文学賞のトップレベルか、中にはそれを凌駕すると思われるほどの質の高さである。若い世代への言語力の信頼をいだかせる力量を示している。惜しくも佳作になったが「軍艦岩」（堀口現代人）の思考の手で匍匐するような彫り深い文章や、「蒼い世界」（小田切ユウ）の寮の日常風景に開かれる外界の白と蒼の光景描写などは、優れた文章と言える。「アトラップ・レーヴ」（西上礼）、「楽園」（木坂京）、「初恋」（山中勇樹）なども一つのトーンを有したスタイルに魅力が溢れていた。ストーリーや構成を整えればもっと実力が発揮されるはずで、今後に大いに期待できる。また「ジンクスの日」（米井暢成）なども、構成技術の斬新さは、銀華文学賞ではお目にかかれない大胆な試みである。これに劇的クライマックスを周到に用意すれば、衝撃的な作品になったかもしれない。

中でももう少しで最優秀賞に手が届きそうだったのは、薛沙耶伽氏の「作品」で、文章力、ストーリー、題材のインパクトなど、力量は十分窺われ、選考委員の半数は最優秀賞に推したが、わずかに残りの半数の同意が得られなかった。そのあたりの事情に触れると、まず、この小説の良い点は、着眼も現代性も鮮やかで、読ませる力、組み立てる力は群れを抜いているということにあった。しかし二、三ヶ月の半胎児の流産の有様が、果たして現代の水洗トイレで、手に掬いとることが可能かどうか、奇異なグロテスクさと同時にそのリアリティの薄さが気になった。むしろこの作品で吸引力があるのは、婚約の過程と、姑のキャラクターである。夫の職業が、コンピューターによる芸術作品作家というのも、ややリアリティが希薄で、この胎児が素材として完全に組み込まれ、その死が生命の「作品」として完成する結末に、何か機械的な人工の冷酷さを感じてしまうことに、疑問が残った。生命とはこういうものだろうか。電子作品に昇華しきれるものだろうか。筆者の母性を含む生命観に、ふくらみや優しさが遠のいていることに、理知への過度の傾きを感じた。造形力や素材への眼は、すでにプロとしてやっていける力を示している。書くことへの姿勢を見つめ直して足元を固めてやっていけば、やがて広く注目される存在となるかもしれない。

渡部裕也氏の「未踏の創造と死と」も、芸術とコンピュータの関連にアプローチしている舞台は共通している。芸術家の死がかかっているという点、先端性という点では、こちらの方が尖鋭かもしれない。脳に埋め込まれたチップによって、芸術創造の秘密に迫る剔出度は、鋭利である。芸術創造の秘密をコンピュータによって完全に解析する近未来を表しているが、逆に人間が解析の対象として痩せ細ってふくらみをなくしている。機械による解析によって、人間が痩せ細っていく現象を、期せずして、伴ってしまっている。作品のこの面をいまさらどうすることもできないが、あえてそれを受け入れた上で、鋭さを買い、なおかつこういう重要な問題が人間に迫っている喫緊性を提出していることは、評価できた。

中山喬章氏の「白魔術」は、インドネシアの風土呪術を題材にしていて興味深い。特殊な祈祷によって肉体が強固になり、想像を超えた治癒も現実になる熱帯の風土の特異性がよく出ていて、現代文明への思わぬアンチテーゼを突き付けてくる。筆者のインドネシア体験をよく生かして、反文明の視点を提出し得ている。ただ、前半でインドネシア人の履歴書を書く学生たちの幼稚な面など、長過ぎて、なかなか本題に入っていかない点、主人公の福島原発のトラウマを出すのが遅過ぎ、最後の、魔術によって魂が時空を超えて福島に帰り、トラウマが晴れるという肝心な結節が弱いので、腰を入れて直す必要があるだろう。この題材は、極めて今日的なテーマを含んでいることから、ゆっくり手を入れて、完成させて発表してもらいたい気がする。

「プリンセス・パラドックス」は、女性同士の恋愛の復活を描いて、題材そのものが新鮮だった。筆者の倫子氏は、文章感覚もよく、執着する心理もきめ細かく作品に織り込んでいて、味わい濃く流れを匂わせている。ただ、前の作品の段階では恋人が女性同士であることが、なかなかはっきりせず、これをそのまま男女の愛としても十分成立しそ

入選

「豪雨」　ソウダソウ
「Built-in Memory」　友井コウ
「ライト」　鏑木一京
「私を呼んで」　夏野抹茶
「火あそび」　金子　月
「学者を求めて」　かきあげあゆみ
「某の欲望」　佐藤龍一
「語るべきこと」　初鳥卓真

うにも思えた。女性同士でなければ出てこない世界をもっと濃密にしてもよかったのではないか。しかしこの領域の恋愛を、ここまで正面切って打ち出してきたのは、「文芸思潮」新人賞だけでなく、銀華文学賞を含めて初めてなので、若い力として注目したい。

壁晃弘氏の「宝を後にして」は、アルバイト現場で仲良くなったベトナム人の労働者との付き合いを通して、不法労働者の苦しい立場と国外退去の過程を描いて、切迫性があった。日本の出入国管理の冷酷な現場をここまで伝えている作品は稀有だろう。借金をしてベトナムから日本へ来、苦しい中でベトナムの家族に送金する外国人労働者の実態は、よく聞くようで、小説としてはなかなかお目にかかれない。その意味では、体験的な事実も散りばめられたいい作品になっていると思う。ただし、タイトルはいただけない。「大宝建設」で働いていて、「従業員こそ会社の宝」という社是にしか関連が求められず、テーマとあまりに離れているタイトルは、作品を貶める。

全体に、今回の新人賞は少数精鋭の文章軍団のような印象を持った。若い世代にこうした真の文章創作の力を持った書き手が少なからずいるという確信は、今後に大きな期待を持たせる。将来日本文学を背負っていけるだけの実力が層として存在している希望を抱いた。ただ、タイトルの付け方は共通して拙劣なので、テーマをしっかり象徴する言葉を選んでほしい。タイトルが難しいのは事実だが、創作を重ね、他者からの声も入れることで乗り越えられると信じている。

不謹慎だが、銀華文学賞と新人賞をどうしても比較してしまう。銀華文学賞を白組、新人賞を紅組とすると、第一回目は紅組の旗色がよく「出所証明」一作でかろうじて持ち直した。二回目は圧倒的に白組の勝勢、今回は、白組の勝勢だが、応募数の少なさからすると、実質的には、かなり肉薄している。もし応募数が増えたらどうなるか、楽しみなところではある。

出来の良い作品が多かった

小浜清志

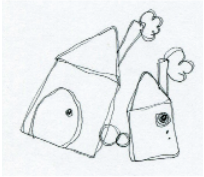
今回も出来の良い作品が数多くあり、文学の裾野の広がりに驚嘆した。しかしながら特出した作品の出現しなかった事は残念であった。得点的にはいいものの、訴えてくる何かが足りなかった。構成や筆力に秀れていても作品の輝きがないのは何故だろうかと考えてみた。書き手そのものが作品にのめり込んでいないのではないのだろうか。シビレエイは自らがシビれているからこそ他もシビれさせると言うコラムを読んだことがあるが、作者は自ら選んだテーマにシビれなければいけない。もしくは書きながら思索が深まっていったという過程があれば読み手は必ず惹かれるものである。書きながしてはいけないし、ましてや推敲の有無がどれほど重要であるかを知らなくてはいけない。

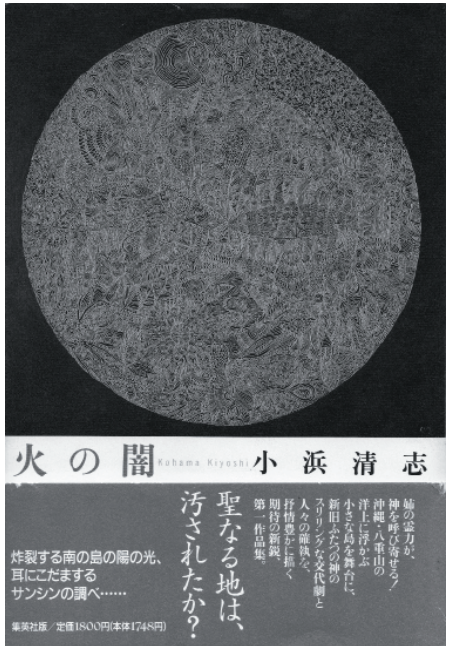
「作品」であるが、奇抜な発想と独特の世界観に舌をまいたものの、発想を結びつけるのに腐心するあまり質を下げてしまったのが欠点であった。テーマは時間をかけ、熟成させるものであり、思いつきで書きあげても底の浅さだけが目立ってくる。日ごろからうたがっていることや、遠い日に受けた感銘などを書き止めて作品にすれば秀作が生まれるはずである。

「軍艦岩」は何故台湾でなければいけないのかが省かれていて精彩を欠いてしまった。本気を感じさせる筆力であるが、このような文章は文飾になる可能性もあるので要注意である。

「宝を後にして」は日本に働きに来た外国の若者たちを描いた作品でリアリティーもあり読み手もうならせる技法もあった。しかし、このような人たちを知っていますという作風に流されたのが惜しい。もう少し交流関係も広げていたらよかったかもしれない。

「プリンセス・パラドックス」は非常に複雑で味わいのある作品で、私は最も高い評価をした。次作を是非読んでみたい。これからも書き続けることを期待している。





集英社刊